

第6回新鋭俳句賞

準賞

「砂上の文字」三十句

木内 縉太

砂上の文字

やどかりや砂上の文字の消えやすき
春ゆやけ渚を犬とあとやさき
裏山に斧置き去れる隴かな
涅槃図の百足は嘆くふうでなし
蜜蜂の羽音少女の内緒事
哺乳びん湯に沈めをる桜かな
連弾の兄とおとうとヒヤシンス
太陽面爆発蝌蚪の生まれけり
浜ひるがほ地球は傾ぎつつ廻る
売店の焼そば鹹き夏の湖
カクテルに小さきパラソル夏の宵
白夜の盤上に王の横倒し
園児どち昼寝の国も駆けまはる
蠅の群象の涙を吸ひあへる
井井と物ありにけり夏座敷
舐め上げてソフトクリーム段失せぬ
魚はぬる夜ぞ湖かこふキャンプの灯
原爆忌降車ボタンがいつせいに
ひぐらしや一指に穿つ砂の城
修道女の眼鏡ぎんぶち蔦かづら
電柱の一本として秋思イフ
あたたむる夜食のラップ露しとど
またぐらにトランク据えぬ暖房車
冬木描く鉛筆の芯尖らせて
その中の一馬嘶く神の旅
狩人のこぼせる息の甘からむ
フレームやいづれの花の腐臭なる
警備室にモニターあまたクリスマス
聖菓切る等分すこしづつずれて
聖樹の灯のみを残して眠りけり